

善照寺  
寺報

# ぜんしょうじ

第3号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺  
電話 四七(三五七) 二二三三二  
FAX 〇四七(三九七) 一三三二

## 暑中お見舞い申し上げます

善照寺住職 今岡達雄

暑中お見舞い申し上げます。

皆さんご存じないでしょうが、私は以前に勤務していたシネクタンク「三菱総合研究所」で、サッカー部に所属していました。そんなこともあって六月はほぼサッカー観戦漬けの毎日でした。サッカーの試合ばかりでなく日韓の国民性の違いとか



欧州でもイタリア、スペインな

どラテン系の国とドイツ、イングランドとはサッカーのスタイルが違っていることなど色々なことを見ることが出来て大変おもしろいと思いました。

ワールドカップと梅雨が終わると本格的な夏になります。夏になると七・八月は「おぼん・おせがき」の時期になります。

善照寺の年間行事の中でもこのお盆・施餓鬼が最大のイベントです。昔からずつつと行われてきた行事ですが、最近になって昔からのしきたりが変わりつつあるようです。

行徳ではお米やれんこんを作らなくなり、「せき」「たんぼ」「はずだ」もなくなりました。お盆に必要な飾り付けもお店で買わなければ揃わないようになりまして。家族構成が変わり、生活スタイルが変わりました。おじいちゃん、おばあちゃん頃から行われてきた習慣やしきたりをそのまま続けていくことが段々難しくなってきました。

そこで、寺報第3号では「おぼん」と「おせがき」を特集し、法要とかしきたり(習慣)の意味についてあらためて考えてみました。また、新盆供養のやり方など、普段は行わない習慣については標準的な供養の方法について解説してみました。今年のご供養を行うときに参考になれば幸いです。

暑さはこれから本番です。皆様が健康でお盆を迎えられますよう祈念いたします。 合掌

### 行事予定

平成十四年七月～九月の善照寺の年間行事の予定です。皆様方は非ともお参り下さい。

#### お盆(おぼん)

東京地区

棚経 (七月十三～十五日)

お迎え(七月十三)

お送り(七月十五)

地元地区

棚経 (八月十三～十五日)

お迎え(八月十三)

お送り(八月十五)

#### 新盆

自宅(八月一日～二十五日)

新盆供養(施餓鬼に併修)

#### 施餓鬼会

一時 法話

二時 法要

#### お彼岸秋

入り(九月二十日)

中日(九月二十三日)

明け(九月二十六日)

## 住職法話

月かげの

いたらぬさとは

なけれども

ながむる人の

心にぞすむ

このお歌は浄土宗の宗祖法然上人のご真作です。法然上人のご真作といわれる和歌のうちでも代表的な一首で、鎌倉時代の勅撰和歌集『続千載和歌集』にも選ばれています。和歌を読むときに何故この歌を創ったかを説明する「詞書」というものが示されますが、この歌には光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨の心を」と書かれています。これは観無量寿経という經典の一部で「阿弥陀仏の光明は全世界をあまねく照らし、どんな人をも救い取る」という阿弥陀様の慈悲の心を表したものです。

「月かげの」とは月影です。でもそれは影ではなく光です。阿弥陀様の救いの光を月の光にたとえています。

「いたらぬさとはなけれども」つまり阿弥陀様の救いの光は世界中のあまねく場所を照らしているのだが、

「ながむる人の心にぞすむ」

いくら月が光り輝いていようと、その光を見ようとしな人には光がないのと同じように、阿弥陀仏の光明にも気づかない。逆に月のない夜でも心に月を思い浮かべて月光を見ることが出来るように、阿弥陀様の救いの光は望む人には光り輝く。

信仰の世界では仏心を受け入れる心が大切ですが、この歌は、月の光を眺める人の心としてそれをとらえ、お念仏を称えるわたしたちを守りおさめとる阿弥陀仏の大慈悲を示した名歌といえましょう。

七月から八月にかけて夏の甲子園「高校野球選手権」が行わ



れます。浄土宗で設立された高等学校にも上宮高校、鎮西高校、東海高校など野球の強い学校があります。甲子園で勝ち進んでいくとこの法然上人のお歌を聴くことが出来ます。これらの学校の校歌は法然上人の「月影のうた」になっています。

善照寺の本堂でもこのお歌を見ることが出来ます。本堂の正面の額はこのお歌を変体仮名で書き示したものです。

ちよつと見つけにくいのですが善照寺の庭にもこのお歌の石碑があります。本堂に向かって右側、南無阿弥陀佛と書かれた大きなお墓(十六代住職の墓)の右側にある石碑です。円光大師御詠と題されています。本堂内正面の額と同じ書を石碑に彫つたものです。

ついでの際にお探しになってみて下さい。

(住職 進誉達雄)

## お盆・施餓鬼特集

ご先祖様と一緒にお盆を

もうすぐ来るお盆休み。みなさんはどんなお盆を迎えるのでしょうか。いろいろ計画もあるでしょうが、ご先祖や、一足先に極楽浄土に向かわれた方々と一緒にできる時間を、家族みんなで大切にしたいものです。

お盆の教え

「仏説盂蘭盆経」という経典があります。お釈迦様の弟子に目連尊者という方がおられました。厳しい修行によって神通力を身につけました。そこで自分の亡き母がどのように暮らしているかを見ることにしました。悲しいことに母は餓鬼世界で苦しんでおりました。目連尊者はビックリしてどうしたら母を救えるかお釈迦様に助けを求めま

した。お釈迦様は「目連よ、お前の母は罪が重い。人に施すことをしなかつたので餓鬼道に落ちたのだ」と諭されました。そして母を救う方法として「雨期あけの七月十五日に多くの僧侶が集まるから、諸仏や僧侶達に供養して、母の追善供養をなさい」と申されました。目連尊者がその通りに供養した結果、母親は餓鬼道から救われたそうです。

このお話はたんに母親だけではなく、先に亡くなった父母、近親者を含めた先祖の霊を供養することに発展しました。年に一度、先に亡くなった方々が戻ってくる。これが「おぼん」というものです。

お盆は身近な仏教行事

さて、『阿弥陀経』には阿弥陀さまの極楽浄土に往生すれば、ご縁のあった、先に亡くなった方々と、そこでもう一度会えるという「俱会一処」の教

えが説かれています。家族の方々、あるいは親戚、友達、知人など、さまざまな形でご縁の結ばれた方々、そうした極楽浄土へひと足先に旅立たれた方々は、いつも極楽から私たちを見守って下さっているのですが、仏道修行の合間に家族のもとへとこられる、それがお盆なのです。ご先祖をはじめとする先亡の方々を身近に感じられるお盆は、年に一度のとても大切な仏教行事なのです。



お盆の飾り付け

お客さまを迎える際には、この家庭でもそれなりの準備というものがあるでしょう。お盆にご先祖を迎える際も同じです。まずはお仏壇をきれいに掃除しましょう。そう、特に念入りに。お掃除が終わったら仏壇とは別に精霊棚しょうりょうたなをおまつりするのが正式な方法です。しかし、昨今は新盆には精霊棚を作りませんが通常は仏壇の中に飾り付けることが多くなりました。それでも結構と思います。

精霊棚とは普段お参りしている仏壇とは別に設けるもので、机などで棚を作り、真菰まこも（まこも）で編んだゴザを敷きます。四隅に篠竹を立て真菰の縄を張り、ホオズキやキキョウ、五穀などを飾ります。

ここにいろいろなものを並べていきましょう。まずはお位牌です。お位牌は先祖代々のお位牌、繰り出し位牌、夫婦位牌などすべてお仏壇から移しましょう。



う。そしてその前の中央に香炉、向かって右に口ウソク、左にお花を並べます。

次にお供えですが、仏さまへの供養の水である「閻伽水（あかすい）」を用意しましょう。これは、仏の国の花である蓮の葉（なげれば芋の葉などで代用します）に水を少し入れ、ミソ八ギを数本束ねて添えます。また、ナスとキュウリをサイの目に切つて、洗つたお米と一緒に蓮か芋の葉にのせた「水の子」もお供えしましょう。

次にナスとキュウリで作った牛と馬を用意しましょう。マコモで作ったものでも結構です。これはご先祖さまの乗り物です。速い馬でさつと来ていただき、遅い牛でゆっくり帰っていただく。一緒に過ごす時間を少しでも長く、という素朴な情がうんだ習慣なのでしょう。最後に季節の野菜や果物、お団子やお餅、そうめん、あるいはご先祖の好物などを供えましょう。

### 棚経と墓参り

お盆にはお坊さんが来て精霊棚（仏壇）でお経を上げます。これは仏様の食べ物を清めるための儀式ですから皆さんの家にお伺いするわけです。精霊棚でお経を称えるので棚経ですが、夏の暑い時期なので坊さんにとつては棚行です。十三日から十五日までの間にお伺いします。東京地区は七月、行徳地区は八月です。十三日はお迎え、十五日はお送りになつていきます。お送りが十六日の地方も多いのですが行徳地域では十五日にお送りします。

### 新盆の供養

極楽浄土に往生して初めて迎えるお盆が新盆です。新盆は極楽浄土から初めて家族の元に返つてくるので旅支度が必要になります。旅支度（お米、帽子、履き物、ござ、ちり紙、手ぬぐい、扇子、線香、お小遣い）を用意します。仏具屋さん

でセットで揃っているようです。白い提灯を用意しそこに戒名紙を貼つて到着する場所を明るくします。精霊棚の飾り付けをしてお供物を供えます。これらの準備を七月中に行い八月一日から二十五日までご供養します。実際に帰つてこられるのは十三〜十五日の三日間ですが、その前後は待ちわびる気持ちや、名残惜しむ気持ちを表す期間でしょう。墓参りは通常のお盆と同じ日に行います。

新盆については詳しい資料を寺で配布しています。今年新盆を迎える方はいらっしゃって下さい。

### 施餓鬼（おせがき）

『救拔焰口餓鬼陀羅尼經』という經典があります。あるとき阿難尊者がひとりて瞑想している時、見るからに恐ろしい餓鬼が現われました。そして阿難尊者に向つて、お前は三日後に死んで餓鬼道に落ちると告げたので

す。これを聞いた阿難は恐れおのき、どうすれば、その苦から免れるかと鬼にたずねましたところ、「汝もし一切の餓鬼に飲食を施し、わがためにご三宝を供養すれば、汝も救われ、われもまた餓鬼の苦から免れて天上に救われる」。そこで阿難は、釈尊の教えを受け、餓鬼に施食し、十万偈を供養して餓鬼道に落ちる難から救われたというお話です。

この話にちなんで、多くの仏教寺院では餓鬼に施す供養（施餓鬼会）を行っています。お盆が皆様に縁のある方々の供養ならば、施餓鬼は誰にも供養されていない方々の供養です。縁のある人々の供養だけはいけないうのが施餓鬼の最も大切な教えです。

善照寺では八月十七日が施餓鬼会です。塔婆を建て有縁の方々と無縁の霊の供養をします。この時あわせて新盆の塔婆供養も行っています。

（住職記）



お山での修行(一)

住職である父が二度目の脳梗塞の発作を起こして入院し、もう長くは持たないだろうと宣告されたのは、私が大学四年の秋でした。浄土宗の僧侶になるには三年半かかります。父が長くないかもしれないとなつてやつと、修行に行こうという決心を固めました。幸い父は奇跡的な快復を見せましたが、修行に行く予定は変わりませんでした。

春になり大学院に進学した私は、希望であったネズミを使ったホルモンの研究をはじめました。研究の世界に足を踏み入れたばかりですので、いろいろとうまくいかないことが山積みでしたが、そんな中いよいよ夏が到来し、私はうまくいかない研究を一時中止して、京都の大本山金戒光明寺へ、三週間の修行に出かけたのです。

一枚刈りの頭を帽子で隠し、大きなスーツケースに経本やら

お袈裟やらお数珠やらを詰めて新幹線に乗り込んだ私は、ちよつとした旅行気分だったかもしれないません。

窓の外を流れる景色に、旅に特有の解放感と不安感を感じておりました。東京を過ぎると、窓の外は緑の山々に変わり、日本とはこんなにも緑の多い国であつたかと驚かされます。

小学生の頃に行つたきりの京都は、駅が立派に改築されており、案内所で寺の場所をたずね、重いスーツケースを引きずつて、言われたバスに乗り込みます。バスを降りて、京都の暑い日射しの下、重いスーツケースと一緒に石段を登り、大きな山門をくぐつて、「会場」と書かれた看板のある建物を何とか見つけたのはちょうど夕餉の時刻でした。初々し

仏さまからの手紙

い青い頭の、互いに見も知らぬ若者たちが、黙つてご飯を食べておりました。その夜は、知り合いになつた仲間たちと、煩惱グズ(ジューズ)やらお菓子やら煙草やら)を買いそろえたのでした。もちろんあとで没収されましたが…。

そんなのにん気でいられたのは、もちろんその日までだったので。

本番は次の日から。父に教わつておきながら、衣の着方も満足にわからぬ私でしたが、むりやり衣を着込み、まずは開講式で足をしびれさせます。

続いて鬼教官たちから、厳しいルールを言い渡されます。移動はすべてお念仏を唱えながら。食事中も正座で、私語厳禁。冷房もなく、厚い衣を着せられ、長時間うごかずに講義を聞き続けます。大学で二年間の内容を、三週間×三回で学ぶのですから、まさに朝から晩まで講義が続きます。

講義の間はお勤めです。はじめにお勤めをする人も多く、厳しい指導員から何度もやり直しを命ぜられます。足首と膝の痛みはいつも最高潮でした。

同じことが毎日繰り返されました。一週間が異様に長く、刑務所とはこんなものかと勝手に想像したものです。

一週間が経つたとき、私たちは初めて「阿弥陀堂」という建物に連れて行かれました。阿弥陀さまの大仏が鎮座しており、畳が敷いてあるだけです。

仏前に整列させられたあと、指導員の僧がひとり、口を開きました。このことは今でも忘れられません。

「いままで一週間、毎日やってきたけれども、おまえたちの中で、本当に阿弥陀さまを信じられる者は、おるか」

私が覚えている限り、誰ひとり手を挙げませんでした。

(副住職 声誉達彦)

事業報告

三月二十九日副住職学位取得

副住職今岡達彦は大学院後期課程(博士課程)に学んでいましたが、この日全課程を修了、博士論文の審査を受け東京大学より博士(理学)号を授与されました。

四月一日副住職初出勤

副住職今岡達彦は独立行政法人放射線医学総合研究所に就職し四月一日に初出勤しました。勤務場所は稲毛です。

四月五日住職増上寺説教

住職今岡達彦は毎年四月に行われる大本山増上寺「御忌会」で千名近い檀信徒の前で大説教を行いました。御忌会は法然上人の命日のご供養で、善照寺では初念仏会で行っているものです。増上寺では四月上旬に行われず。



大本山増上寺大殿で説教する住職

訃報

三月十七日法伝寺前住職遷化

湊法伝寺前住職境法順師が遷化されました。

春彼岸以降お亡くなりになった檀信徒の方々は次の通りです。皆様も一緒に冥福を祈りましょう。

三月三十日 中村八ツ様

喪主 湊新田 中村 満様

四月廿四日 青山ウメノ様

喪主 伊勢宿 青山 登様

五月七日 田中比奈子様

喪主 妙典 田中 修様

五月廿八日 平松金生様

喪主 押切 平松弘子様

六月六日 小川まさ様

喪主 湊新田 小川勝利様

六月七日 青山千代様

喪主 本行徳 青山末吉様

南無阿弥陀佛

ご寄付

六月廿三日故水野武様の七回忌法要が行われ施主水野登久子様より導師用袈裟・衣一式、脇導師用袈裟・衣二式が寄付されました。



住職の説明を聞くMITの学生

語で教義を説明するのはなんと難しいことかと思いつつも、住職の説明に聞き入っている米国人のお客様の様子を見て、善照寺にてのちよつとした異文化交流に、わくわくしました。  
(副住職室久美英)

編集後記

六月二十一日、米国からマサチューセッツ工科大学(MIT)の講師と大学院生の方々が善照寺に来訪されました。浄土宗の教えと善照寺について、住職から学生達に説明があり、皆様熱心に聞いておられました。私も娘と一緒に勉強がてら一緒にさせていただきます。英語で教義を説明するのはなんと難しいことかと思いつつも、住職の説明に聞き入っている米国人のお客様の様子を見て、善照寺にてのちよつとした異文化交流に、わくわくしました。